

海外レポート

ラトビア～バルトの真珠

公害等調整委員会事務局研究官
田口 和也 | Taguchi Kazuya

■埼玉県浦和出身。1980年東京大学法学部卒、総理府（当時）採用。公害等調整委員会や日本学術会議の事務局長などを経て、現職。



昨年(2018年)9月に内閣府の青年国際交流事業で、バルト3国の真ん中の国ラトビアを18日間訪れた。もちろん私は青年ではなく、日本青年派遣団13名の団長役での訪問であった。

訪問先は、首都のリガと西部の港町リエバーヤ、古都クルディーガなどである。ラトビアは、1918年の独立から100周年であり、無限大マー

クを用いた「Latvija 100」のロゴが、あちらこちらで見られた。

1. ラトビアとはどんな国か

(1) 国とは言葉

「ラトビア語は、他の国の言葉とは違うんだ」とラトビア青年は言った。青年同士の交流会での1コマである。

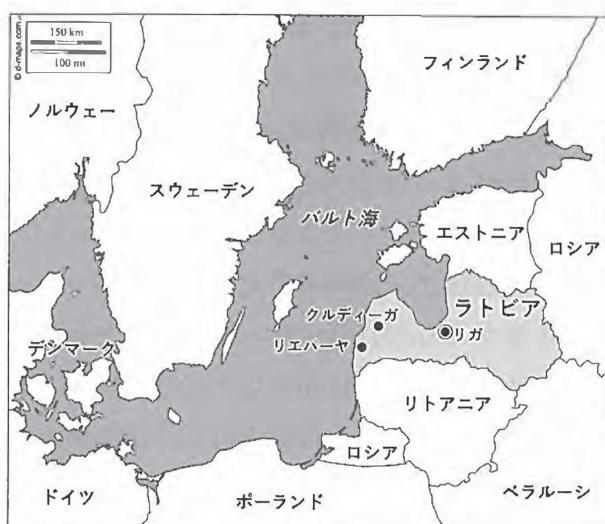
聞けば、ラトビア語はバルト語に属し、インド・ヨーロッパ語族の一つではあるが、フランス、イタリアなどのラテン語、ドイツ、スウェーデンなどのゲルマン語はもちろん、ロシア、東欧などのスラブ語とも系統が異なるという。

バルト語は、今では南隣のリトアニア語とラトビア語の二つだけとなっている。では、リトアニアの人とは話が通じるのか、と聞くと、お互いにほとんど言葉は分からぬとのこと。

また、バルト3国で北隣のエストニア語はフィンランドのフィン語と同じウラル語族で、インド・ヨーロッパ語族にも入っていない。

このように、周辺諸国とは、言語上隔たりがあり、言葉が通じないことが、バルト3国がそ

ラトビアの位置



Copyright@d-maps.com (<https://d-maps.com/m/europa/baltique/baltique05.pdf>)

それぞれ独立している理由と思われる。

「おはよう」はラトビア語でLabrītと言う。「こんにちは」はLabdien、「今晚は」はLabvakarとなる。「ありがとう」はPaldiesだ。

こういう基本的な言葉や言い回しを、いくつかガイドブックなどで覚えて行ったのだが、実際には、現地でのコミュニケーションは英語で行われた。語学は苦手なので苦戦した。

向こうで初めて聞いて自然に覚えたのが、「Nākamā Pietura ○○」で、まず「ナカマ」という発音がとても覚えやすい。これは、路線バスに乗ると、「次の停留所は○○」と、繰り返し何度もアナウンスされたので、覚えてしまったという訳。

(2) 複雑な民族構成と言語

ラトビアの人口は211万人（2018年1月現在）、これは、長野県や岐阜県と同じくらいである。

民族構成は、ラトビア人が61%、ロシア人が26%となっている（ロシア系で数十万人にのぼる「非国籍者」の問題もある）。他に、旧ソ連のベラルーシ人、ウクライナ人が合わせて6%だ。



リガの「ブラックヘッドの会館」
の前で（筆者）

第1次世界大戦後の独立時代は、ラトビア人が約75%いたそうだ。歴史的経緯からドイツ人も5%ほどいたらしいが、第2次世界大戦直前の独ソ不可侵条約の裏で交わされた密約で、ラトビアはソ連の勢力圏とされ、大戦が始まるとソ連がラトビアを占領すると、ナチスは、数万人のドイツ人をドイツ領内に引き上げさせた。

戦後、大勢のラトビア人が強制的にシベリアに送られ、代わりにソ連系の人々が移住してきた。一時期はラトビア人の割合は60%を割り込んでいたほどだ。

この時期にはロシア語が必修だったこともあり、現在でもロシア語を主に話す人は30%を超えている。また、都市部でその割合が高いため（首都のリガで約40%など）、職業上の必要性などから、ラトビア人でも約70%がロシア語を話せるという。

1991年のラトビア独立後は、公用語はラトビア語に限られた。2012年にロシア語を公用語に追加するかどうかで国民投票が行われたが、約75%の反対多数で否決されている。学校教育の場でもラトビア語を優先する政策をとっている。

一方、ラトビアでは英語教育に熱心で、小学校入学前から始めている。このため、若年層を中心に英語を流暢に話せる者が増えている。

このような事情から、ラトビアでは、母語十一つの言語を話せる者は95%、母語十二つの言語を話せる者は54%となっている。

(3) 平坦な国土、欧洲一の滝は高さ2M

ラトビアの面積は6.5万km²で、北海道より一回り小さく、国全体が平坦な地勢で、湖と森の国だ。起伏があるのは東寄りの一部地域だけで、最も高い場所でも海拔312M。河川は3,800、湖は2,256で、森林面積は国土の約48%を占める。



ヴェンタの滝（全景）

クルディーガでは、街並みのすぐ近くにある「欧洲一」のヴェンタの滝に案内された。日本の河川でよく見かける堰に似た景色で、「これが滝なんだ」と思った。何が欧洲一かというと、滝の幅の広さが 250M で一番ということである。

2. 伝統と現代、ラトビアの魅力

(1) 首都リガは世界文化遺産の街

リガは 13 世紀初めに創建され、バルト 3 国で最も古く、70 万人が住む最も大きい都市だ。

中心市街地は落ち着いた雰囲気の町で、特にダウガワ川の東岸に面する 0.5km² の旧市街が、ユネスコに登録されている。古い教会などでは、当初の建築が 13 世紀まで遡れるものもある。

リガ大聖堂やブラックヘッド会館など見所も多い。リガ城は、今は大統領官邸となっている。

旧市街の他にも、アルベルタ通りには 19 世紀末から 20 世紀初めに造られたユーゲント・シュティール（アールヌーボー）建築群がある。また、新市街の新しい建築でも、レトロな雰囲気の建物が、あちこちに見られる。

中心市街地では、法的な規制や建築に際しての許可などによって、建物の高さも 6、7 階建に抑えられており、高い建築物は昔の教会くらいで、新しい高層建築はダウガワ川の対岸や中

心市街地の外側にはほぼ限られている。

(2) キリスト教と自然信仰

ラトビアは、中世以来の歴史的な事情から、キリスト教の主要な宗派…プロテスタント（ルター派など）、カトリック、ロシア正教の信者がそれぞれ在住している。

また、リガをはじめ、各都市や村々では多くの教会が建てられ、信者が通うとともに、貴重な文化遺産、ひいては観光資源ともなっている。

一方、キリスト教化以前の自然信仰も、民族文化、習俗の中に根付いているように思われる。例えば、ラトビアで盛んに作られるニット製品の模様でも、古い信仰の対象である神々や樹木、雷などを象徴する図柄・文様が描かれる。

(3) 歌と踊りは民族文化の花

ラトビアでは、Dainas（民謡）が 100 万曲以上あることでも分かるように、音楽が盛んだ。

「歌と踊りの祭典」が 5 年ごとに国を挙げて開催され、参加者も観客も数万人に達する。これは 1873 年から続いている。各地域の民族衣装を身に着け、髪を花で飾った大勢の参加者が歌い踊る様子は、華やかであり、壯觀でもある。

一見して華やかな祭典だが、その影には、このような活動を続けることで民族的な一体性を維持し、他国の支配に耐え抜いて独立へとつなげていった歴史がある。

もちろんラトビアでは、他の古典音楽・現代音楽やアートも盛んだ。リエパーヤは、ラトビアのロック発祥の地としても知られている。

リガでは 19 世紀に建てられた国立オペラ座で、バレエを鑑賞した。また、リエパーヤでは現代的なホール Great Amber で、クラシックのコンサートを聴いた。いずれも観客席は、ほぼ満員。バレエ鑑賞では小さな子供も来ていた



リガの「国立オペラ座」



リエパーアの「海の大聖堂」(ロシア正教会)

し、コンサートの演奏者にも若手の姿があった。

3. ラトビアのたどってきた道

(1) 苦難の歴史の概観（近代以前）

ラトビアの地には、紀元前から自然信仰のラトビア人が住んでいた。13世紀初めごろからドイツ騎士団による侵攻が始まった。これはローマ教皇が呼びかけた「北方十字軍」の一環で、異教徒をキリスト教化することを名目に、実態は領地の獲得が目的だったと言えよう。

1201年には司教アルベルトに率いられた一團がリガに拠点を構えた。リガは、1282年にハンザ同盟に加盟し、貿易拠点として繁栄した。

その後、15世紀にドイツ騎士団はポーランド・リトアニア連合に敗れて衰退し、支配勢力が交代する。さらに、17世紀にスウェーデンが強大化すると、リガ周辺から北東部にかけての地域はその領土となったが、18世紀初めの北方大戦争の後、スウェーデンの支配地はロシア領となり、18世紀末のポーランド分割により、ラトビアの全域が帝政ロシアの領域に入った。

なお、日露戦争の時には、バルチック艦隊が、リエパーアから日本に向けて出撃している。

(2) 国旗のデザインの由来（伝説）

ラトビアの国旗は、上下が赤で真ん中に白のラインが入っている。赤は、やや茶色に近い濃い色だ。

その昔、降伏を拒否して戦い続けたラトビア人の将軍が、ついに倒れて白い旗の上に横たえられると、将軍の血が、旗の両側を赤く染め、体の真下の部分だけが白く残ったと云う。

「それはいつごろの出来事ですか」と尋ねる私に、ラトビア青年は「いつという事ではなく、これはあくまで伝説です」と語った。資料によつては、13世紀後半の出来事とされている。

(3) 苦難の歴史は続く（近現代）

第1次世界大戦後の1918年、ラトビアは念願の独立を達成する。日本との友好関係は1928年に始まり、リガに公使館が置かれた。

しかし、ラトビアの苦難の歴史は続く。

第2次世界大戦が始まると、前述のように初めはソ連の侵略を受け、次いで独ソ戦が始まると、ナチスドイツ、最後にまたソ連の侵攻があり、国土を占領された。圧倒的な軍事力を有するソ連やドイツに対して、貧弱な装備で立ち向かったものの、撃退など無理なことであった。

戦後は、ソ連を構成する一共和国とされたが、

実質はソ連による恐怖の支配を受けたのだ。

リガ市内には、その名も「占領博物館」があって、苦難の歴史を記憶に留めるべく、この時期の資料を展示してある。

また、リガの「KGBビルディング」は元々著名な建築家が設計したビル、リエパーヤの「軍港刑務所」は元病院だったのだが、それぞれ改造されて取調べや拘禁のために使われた施設である。通路なども鉄格子で仕切られ、部屋は窓をレンガで塞ぎ、扉も分厚い上に重く、狭くて非衛生的で陰惨そのものであった。

帝政ロシアやナチス占領当時だけでなく、旧ソ連時代には、反ソ連と疑われただけで、KGBによる過酷な取調べ・拷問や不当な拘禁・処刑が行われた。他国に支配された国の国民がいかに悲惨な目に遭うかを示している。

(4) 人間の鎖、再独立そして EU の一員に

バルト3国では、ソ連からの独立の機運が高まつた1989年8月に、200万人が参加して「バルトの道」で手と手をつなぎ、600km以上にも及ぶ「人間の鎖」を作った。

この非暴力の抵抗運動で、密約に基づくバルト3国の占領を正義に反するとして否定し、ソ連崩壊と3国独立の最初の兆しとなった。

わずか2年後の1991年、バルト3国は念願の独立と国際社会への復帰を果たした。

日本は、同じ年にラトビアを国家承認し、外交関係を開設した。2007年には、先の天皇皇后両陛下がご訪問されている。

ラトビアは、2004年にEUとNATOに加盟した。経済面では、2014年にユーロを導入、2016年にOECDに加盟するなど、西欧志向が強い。小国なので、高等教育の充実やITなど将来性のある分野を重点的に伸ばそうとしている。

る。

キャッシュレス化も進み、コーヒーの自動販売機（機械の中で紙カップにコーヒーを注ぐタイプのもの）でさえ、コイン投入口がなくクレジット・カードを読み取る方式だった。

なお最近は、若年層を中心に人口の国外流出が続き、人口減少と少子化に悩んでいる。

安全保障面では、ラトビア軍は5,300人と少なく、現在カナダ主体のNATO軍の大隊が展開している。NATO軍も少数ではあるが、その存在自体が安心の基となっている。

このように、ロシアに対する安全保障面での警戒は必要だが、ラトビアの強みは、地理的に欧州とロシアをつなぐ地位を占めていることがあり、ロシアとの経済的な関係は、今なお重要である。

4. 国際青年交流事業

ラトビア訪問では、公式日程の他、両国青年によるディスカッション（テーマはSDGs）や懇談、施設見学やホームステイなどが行われた。

とりわけ、ライモンツ・ベーヨニス大統領にお会いし懇談する機会が得られたことは、たいへん有意義なことであった。

帰国後は引き続き、日本青年派遣団とともに来日した10人のラトビア青年をはじめ、6か国の招聘青年が集まって、日本側青年も交えて各種プログラムが行われた。

このうち、各国青年によるディスカッションは、皇太子・同妃両殿下（今上天皇皇后両陛下）がご視察になった。皇太子殿下は、引き続きレセプションにもご臨席され、ご挨拶、各國代表とのご懇談を行われた。ラトビア青年の1人は「プリンスに会えた」と喜んでいた。